

Title	ボードレールにおける「反=宗教」の思想 : 「聖なる売春」と『悪の華』の詩学
Author(s)	徳永, 文和
Citation	Gallia. 30 P.27-P.34
Issue Date	1991-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4458
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ボードレールにおける「反＝宗教」の思想

——「聖なる売春」と『悪の華』の詩学——

徳 永 文 和

『悪の華』の巻頭に位置する詩《Bénédiction》では、詩創造の道を歩む上でこの詩集の詩人が甘受する苦難を礼讃する主題（ロマン主義的ドロリズム——神によって選ばれた詩人がこの世で甘受する苦は、全宇宙的浄化再生にとって本質的有効性を持つと見做す思想で、天啓思想、反革命運動の文学思想の系譜に位置する）が展開されている¹¹⁾。作者ボードレールは、このロマン主義的ドロリズムの主題を導入するにあたって、詩人の苦難をキリスト受難に徹底的に重ねる手法を採用しており、このことは、テーマ的観点からこの詩を分割した場合の第一部（v. 1-36）と第三部（v. 53-76）に明白に読みとれる。特に、第一部末尾（v. 29-36すなわち第八-九詩節）では、パリサイ人に嘲弄されつつ十字架への道を歩むイエスのモチーフが、第三部冒頭（v. 53-56すなわち第十三詩節）では、既に十字架にかけられたイエスのモチーフが導入されており、第一部と第三部との緊密な連続性が見てとれる。ここから、第二部（v. 37-52すなわち第十一-十三詩節、以下本稿では「中間部四詩節」と呼ぶ）の主題こそ、『悪の華』の詩人における受難の基本的構図を要約するテーマに他ならないことが自ずから帰結されよう。

J.-D.ヒューバートや阿部良雄氏の分析・注釈にもある通り、この中間部四詩節とは、ボードレール自身の定義による「反＝宗教」の定立部分である¹²⁾。論者は、今後一連の論考を通して、《Bénédiction》におけるキリスト受難のライトモチーフとこの詩の中間部に定立された反＝宗教の両主題の意義について考察を行うことになる。本稿は、その一環として、ボードレールにおける反＝宗教の思想が『悪の華』の詩学を本質的に形成するものの一つに他ならないとの観点から、この思想の全容を解明することを主目的としている。

(1) 天啓思想、反革命運動を淵源とするロマン主義的ドロリズムに関しては、Paul Bénichou, *Le Sacre de l'écrivain*, José Corti, 1985 (初版1973), pp.91-192を参照。また、ボードレールにおける天啓思想的側面に関しては、Georges Blin, *Baudelaire*, Gallimard, 1939, 及びA.-M. Amiot, *Baudelaire et l'illuminisme*, Nizet, 1982の研究が出色であり本稿も多くを負っている。

(2) J.-D. Hubert, *L'Esthétique des 《Fleurs du Mal》*, Pierre Cailler, 1953, pp.224-225. 阿部良雄訳『ボードレール全集』1, 筑摩書房, 1983, p.466, 註14.

I

ボードレールが反＝宗教について記述しているいくつかの箇所のうち、本稿では、断片的とはいえ明晰な精神によって書き記された『赤裸の心』IVの断章における明確なテーマに着目したい。

Analyse des contre-religions, exemple : la prostitution sacrée.

Qu'est-ce que la prostitution sacrée ?

Excitation nerveuse.

Mysticité du paganisme.

Le mysticisme, trait d'union entre le paganisme et le christianisme.

Le paganisme et le christianisme se prouvent réciproquement.⁽³⁾

この断章で、ボードレールは、複数形に置かれた「反＝宗教」を異教的なものの範疇に属させつつ、その例として「聖なる売春」を挙げている⁽⁴⁾。クレペ＝ブランの校訂本も言及しているように、「聖なる売春」とは、ヘロドトス『歴史』I-199や旧約聖書の特に「バルク書」VIにおいて批判的に指摘されている古代異教の地に言わば普遍的に存在した「神殿売春」のコンテキストをふまえた上での表現であると解釈される⁽⁵⁾。古代異教では、愛欲と豊穡の女神（互いに同一視され神話的符合性を有するミュリッタ、アスタルテ、アフロディテなどの女神）の神殿において、実際に金銭（額は任意）を介して行われたいわゆる売春の古い形態としての風習から、通過儀礼の一環としての儀式や大地の豊穡と生命の確約の祈願を主目的とした祭式に至るまで、その宗教的ないしは習俗的目的の如何によらず、また、時代と地域によってその様式には多少の相違があるとはいえ、神殿という聖なる場所で肉体の享楽の秘儀が行われたとされる。この場合、「バルク書」などが記しているように、「神殿売春」は、何よりもまず偶像崇拜をその祭式の本質としていたこと、しかもこの

(3) *Pl*, I, p.678. 以下ボードレールの引用はすべて Claude Pichois 校訂の Pléiade 版全集二巻本 *Œuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, t.I-1975 (略号 *Pl*, I), t.II-1976 (略号 *Pl*, II) による。また、本稿全引用におけるイタリックはすべてボードレールによる。

(4) ワーグナー論における「〈反＝宗教〉＝〈悪魔的宗教〉」の方程式に照らすならば、悪魔的要素によって結果的に真の宗教の高みにまで昇りつめること可能なあらゆる形態を複数形で表していると考えられる。

(5) *Journaux intimes*, édition critique par Jacques Crépet et Georges Blin, José Corti, 1949, p.331, n.1.

場合の偶像が、アスタルテなどの女神を象ったいわゆる偶像であることはもちろん、それ以上に、女神の具身者として機能した現実の女性に対する崇拝とその女性との性的行為によって成立した淫祀祭式であったこと、加えて、推論するに、そこにおける究極的目標とは官能の享受に他ならないことに注意せねばならない。

ところで、『悪の花』にまぎれもなく存在する官能志向と女性讚美のテーマに着目するならば、件の断章において、ボードレールが、上記古代異教における偶像崇拝と淫祀祭式の実際の風習を念頭に置きつつその存在意義を洞察した上で、「聖なる売春」を例として挙げた反=宗教を明確な見地から異教的コンテクストに位置づけていると解釈される。ジョルジュ・ブランの言葉を借りるならば、「なんびとも、ボードレールほどの反=宗教をもって、女性の豪奢な世界を、裸の肌の上の毛皮の愛撫を、肌着の下の乳房の香りを、髪の毛の重いうねりを讚美しなかった」のであり、「異教的なものがボードレールを誘うのは明らか」と言える¹⁶⁾。

しかしながら、同じくブランの研究が示したように、また、件の断章でボードレール自身「異教とキリスト教とは相互に証明し合う」と断言しているように、ボードレールが、本来異教的崇拝・祭式たる反=宗教を盲目的に珍重しているのではなく、彼の異教主義が二律背反的性質のものである点を看過してはならない。すなわち、言うまでもなくキリスト教は偶像崇拝・淫祀邪教を禁じる宗教であって、この限りではキリスト教と異教は対立する二要素でしかないけれども、ボードレールは件の断章において、異教的崇拝・祭式が、逆説的にキリスト教的コンテクストにおいて現実性を持つ人間存在の根源的条件の証明をするものに他ならず、この意味で、キリスト教と異教とが純然たる対立要素としてではなく言わば弁証法的に止揚され得る相互に不可欠な二要素として認識された上で、きわめて本質的逆説でもって反=宗教の思想とその実践に対して積極的存在意義を与えている点に着目せねばならない。

この我々の推論の裏付けは、再びブランの言葉を借りるならば、「ボードレールにおいて、異教的傾向や、自然の神秘的傾向や、肉体の讚美といったもの、そして要するに〈女性〉がどのような反撥に出会うことになるか」を考察することによって得られる¹⁷⁾。以下、『現代生活の画家』第十章と第十一章において、共通の観点から連続的に展開されている議論におけるボードレールの女性観と自然観を浮き彫りにすることによって、反=宗教の二律背反的異教主義の構図とその存在意義について考察して行く。

(6) Blin, *op. cit.*, p.59, p.63.

(7) *Ibid.*, p.73.

II

ボードレールはまず、「女」と題された第十章で、「偶像」としての女性の魅力とその存在意義について、豊富なレトリックを駆使しつつ詳述している。その主要部分を以下に引く。

L'être qui est, pour la plupart des hommes, la source des plus vives, et même (...) des plus durables jouissances ; l'être vers qui ou au profit de qui tendent tous leurs efforts : (...) c'est un miroitement de toutes les grâces de la nature condensées dans un seul être ; c'est l'objet de l'admiration et de la curiosité la plus vive que le tableau de la vie puisse offrir au contemplateur. C'est une espèce d'idole, stupide peut-être, mais éblouissante, enchanteresse, (...) ⁽⁸⁾

「大部分の男たちにとって最も強烈で、しかも最も永続きする快楽」とは、言うまでもなく肉体の享楽であろう。女性が、そうした男性の享楽の源泉であり、人々の視線を釘付けにする存在であると評し「女＝偶像」と定義している点では、反＝宗教を成立せしめる上で不可欠な機能を果たす女性に対する基本的見解が認められる。しかし、この「女＝偶像」の方程式は、「一種の」という限定詞つきであること、また、女性の魅力を詳述する件で女性それ自体を「美しい」とは形容しておらず、女性を評するにあたってくり返し物質的現前性を暗示する「存在＝生き物」の語を用いている点を考えるならば両義的ニュアンスを含むと解釈され、ここから生身の存在としての女性に対する手放しの讚美を控える姿勢が浮かび上る。ボードレールは、上記引用箇所より少し先の部分において、「いったいどんな詩人が、一人の美女の出現によって引き起される快楽を描くにあたって、女をその衣装から切り離そうなどと考えるだろうか」と反語的に述べつつ、女性が真に美とされ得るには生身の存在に人工的装飾が施される必要のあることを強調している。

人工的装飾の効果のみならずその存在意義を積極的に説いた第十章の論点は、「化粧礼讚」の章題が示しているように第十一章へと連続して行く。第十一章においてボードレールは、まず、思想（史）的観点から前章の議論に説得性をもたせるべく、生身の存在としての女性と人工的手段によって美化された女性との間における決定的相違の問題を、自然と超自然との間の問題として展開する。

La plupart des erreurs relatives au beau naissent de la fausse conception du XVIII^e siècle relative à la morale. La nature fut prise

(8) *Pl*, II, p.713.

dans ce temps-là comme base, source et type de tout bien et de tout beau possibles. La négation du péché originel ne fut pas pour peu de chose dans l'aveuglement général de cette époque. Si toutefois nous consentons à en référer simplement au fait visible, à l'expérience de tous les âges et à la *Gazette des tribunaux*, nous verrons que la nature n'enseigne rien, ou presque rien, c'est-à-dire qu'elle *contraint* l'homme à dormir, à boire, à manger et à se garantir, tant bien que mal, contre les hostilités de l'atmosphère.⁽⁹⁾

引用より明らかなように、ボードレーは、自然が善であり美であるとする十八世紀の思想的傾向に対して真っ向から異を唱え、原罪の観念を肯定しつつ、自然が人間の失墜の事実を表象するものに他ならない点を指摘する。ここでボードレーが言う自然とは、人間も含めたいわゆる自然界全体における生のあらゆる本性的行為及び条件（眠る、食う、飲む、殺す...）ひいては生それ自体を指しており、こうした自然的＝本性的行為、換言するならば、生における受動性は、それ自体「悪」であって決して美や善の範疇に属するものではないとされている。この点に関しては、美や善が能動的意志の行使によって初めて具現されるものであることを述べた同じく「化粧礼讃」の以下の一節より確認される。

Tout ce qui est beau et noble est le résultat de la raison et du calcul. Le crime, dont l'animal humain a puisé le goût dans le ventre de sa mère, est originellement naturel. La vertu, au contraire, est *artificielle*, surnaturelle, (...) Le mal se fait sans effort, *naturellement*, par fatalité; le bien est toujours le produit d'un art. Tout ce que je dis de la nature comme mauvaise conseillère en matière de morale, et de la raison comme véritable rédemptrice et réformatrice, peut être transporté dans l'ordre du beau. Je suis ainsi conduit à regarder la parure comme un des signes de la noblesse primitive de l'âme humaine.⁽¹⁰⁾

美や善は、それ自体悪でしかない自然から脱却が生じる時すなわち超自然においてのみ具現される。そしてそれを可能ならしめるのが、人工的な力を行使すること、すなわち「技巧」〈art〉ひいては「芸術」である。

これら二つの章の位置と主題の連続性からみて、化粧もまた超自然を具現する人工的技巧の

(9) *Ibid.*, p.715.

(10) *Ibid.*, pp.715-716.

一つとして積極的に評価されていることは明白である。このことは、角度を変えて言うならば、生身の存在としての女性は、美の範疇に属さず、自然を表象する存在に他ならないということになる。ボードレーは、同じく「化粧礼讃」の章において、「一種の偶像」すなわち直接的存在としての女性は、超自然を自ら具現する美化された存在となることで真に崇拝に値する「偶像」となり得るという逆説を行使しつつ、この我々の推論に合致する思想を展開している。

La femme est bien dans son droit, et même elle accomplit une espèce de devoir en s'appliquant à paraître magique et surnaturelle ; (...) ; idole, elle doit se dorner pour être adorée. Elle doit donc emprunter à tous les arts les moyens de s'élever au-dessus de la nature pour mieux subjuguier les cœurs et frapper les esprits.⁽¹¹⁾

このようにして考えてみるならば、「最も強烈な享樂の源」としての女性に強く魅惑され女性を偶像として嘆賞しつつも、反＝宗教の実践に際して、同時にキリスト教のコンテクストにおいて、崇拝の対象たる女性に自然の表象を見てとり、それがゆえに、人間の失墜（原罪）と悪としての自然の存在・介入を追認するというボードレーの反＝宗教における二律背反的異教主義の基本的構図を指摘することが可能と言えよう。

III

ここで、『赤裸の心』Ⅳの断章の思想と照応する『火箭』Ⅰの断章における有名な公式に基きつつ、『悪の華』の詩人が悪を善へと自然を超自然へと変容せしめ真の美を具現する「技巧＝芸術」の行使の場面が、他ならぬ反＝宗教の実践に存することを見てみたい。

L'amour, c'est le goût de la prostitution. Il n'est même pas de plaisir noble qui ne puisse être ramené à la Prostitution. / (...) / Qu'est-ce que l'art ? Prostitution.⁽¹²⁾

この断章においてボードレーは、狭義の売春も含めた上での異性に対する性的本能に基づく愛の実践が、芸術創造の原動力に他ならないとの思想を表明していると解釈される⁽¹³⁾。言

(11) *Ibid.*, pp. 716-717.

(12) *PL*, I, p. 649.

(13) ボードレーの「売春」の概念は、散文詩における相互に関連を有する主題「群衆との結婚と孤独」の考察を通して明確化されようが、限られた紙数のため本稿ではあえて言及しない。

うまでもなく詩人にとって固有の芸術とは詩であり、その行使とは詩の創造である。この断章の「芸術=売春」の方程式に「化粧礼讃」のテーゼを適用するならば、自然の浄化克服が「技巧=芸術」、上記断章の文脈における「売春」を通してなされること、すなわち、反=宗教の基本的構図たる肉体の享楽を通してなされるという思想が表明されていると解釈される。このことは角度を変えて言うならば、反=宗教における異教主義の二律背反性にこそ超自然の次元を開元する扉が存在することをボードレールは述べているのであり、こうした点を思想の根拠としつつ彼は、『赤裸の心』Ⅳの断章において、反=宗教の真髓を称して「異教の神秘性」なる表現を用いたのである。ボードレールによれば、この「異教の神秘性」は、生理的現象を示す「神経の興奮」を伴うとされていた。では、「神経の興奮」とは、一体反=宗教の実践におけるどのような現象を指すのであろうか。

ブランによれば、ボードレールは、ブリエール・ド・ボワモンの著作に接することで、超自然的神秘的法悦の瞬間と神経的錯乱状態（ヒステリー、幻覚、狂気など）との間の身体的徴候の面からみた外的符合に興味を持ったとされる⁽¹⁴⁾。件の断章を書くにあたって、ボードレールが、ボワモンの用語と体系を念頭に置きつつ、芸術創造における超自然的神秘的法悦の瞬間を、「神経の興奮」の語で表そうとしたことは十分に考えられる。

我々は、芸術創造に不可欠なる要素の一つ「靈感」が、子供の純真かつ食欲な不断の直感力を本質とすることを説いた『現代生活の画家』第三章に、今問題としている表現と酷似の表現を見出すことによって、「神経の興奮」が、精神病理学の研究対象としての単なる病気の徴候ではなく、芸術創造の具現においてはまさに健康的な現象であることを理解する。

L'enfant voit tout en nouveauté ; il est toujours ivre. Rien ne ressemble plus à ce qu'on appelle l'inspiration, que la joie avec laquelle l'enfant absorbe la forme et la couleur. J'oserai pousser plus loin ; j'affirme que l'inspiration a quelque rapport avec la congestion, et que toute pensée sublime est accompagnée d'une secousse nerveuse, plus ou moins forte, qui retentit jusque dans le cervelet. (...) le génie n'est que l'enfance retrouvée à volonté, l'enfance douée maintenant, pour s'exprimer, d'organes virils et de l'esprit analytique qui lui permet d'ordonner la somme de matériaux involontairement amassée.⁽¹⁵⁾

いみじくもビュトールは、引用文中イタリック表記された「充血」及び「小脳の中まで響

(14) Blin, *op.cit.*, pp.90-91, p.176.

(15) *Pl*, II, p.690.

く神経の震動」が、男性の性的官能の最高点を示す表現に他ならないことを看破している⁽¹⁶⁾。凡そ月並みとも言える「天才＝子供」論を導入したボードレールの意図とは、「あえてもっと遠くまで論を進める」ことによって、「成年男子の諸器官をもつ」に至った詩人＝天才が、その器官の一つを行使する愛の行為における性的官能の極限時に、脳の「充血」「神経の震動」を享受することによってその瞬間に、それまで見えていなかった詩的現実すべてを全く新たな観照をもって完全に再び見出し得る神秘的創造性と天才の超自然的権能について暗示することにあつたと解釈される。

ここで上記批評文における「充血」と同義であると考えられる件の「神経の興奮」の表現と、「芸術＝売春」の方程式の意味とを総合するならば、詩創造の意義とは、「自然＝悪＝原罪」を浄化克服し超自然を具現せしめる技巧の行使にあること、その行使の場が、自然の典型的表象者たる女性への愛の実践＝売春であり、詩創造の具現の瞬間とは、上記意味での売春における官能の最高点の享受によって「再び見出された幼年期」たる「靈感」が充溢する瞬間であるとするボードレールの基本的詩観ときわめて本質的逆説によって初めて意義を有する反＝宗教肯定の思想とが明らかとなろう。この場合、「隠されたその意図において偉大なる自然の道具、罪の女王⁽¹⁷⁾」たる女性は、かつてキリスト教的罪の観念が定着する以前の古代異教の地における「聖なる売春」の主要なる場所であつた「一つの神殿⁽¹⁸⁾」そのものと化し、詩人はその中で、人間の失墜によって不浄性を帯びるに至った全宇宙的自然に終焉をもたらす一つの死を、詩創造のための十字架の上においてわが身に背負うのである。

結び

以上、ボードレールの反＝宗教の思想を、彼の自然観と女性観及び詩創造の実践学の一環としての「売春」のテーゼに照らしつつ考察を行ってきたが、キリスト受難をライトモチーフにする《Bénédictio》の中間部四詩節に反＝宗教が主題化されていることの意義は大きいとア・プリオリに言うことができよう。なぜならば、キリストとは、十字架上での神に対する完全なる従順性における死によって、ボードレールの言う「自然＝悪＝原罪」を浄化克服する超自然的受難者だからである。論者は、次なる論考において、《Bénédictio》中間部四詩節の主題、なかんずく、詩人の「妻」が残酷な仕打ちの果てに詩人の「心臓」をえぐり奪るといふ「死」のモチーフの意義についての考察を行うことになる。

(16) Michel Butor, *Histoire extraordinaire, essai sur un rêve de Baudelaire*, Gallimard, 1961, pp.63-64.

(17) *Les Fleurs du Mal*, XXV (無題詩), v.15-16.

(18) *Ibid.*, IV 《Correspondances》, v.1.